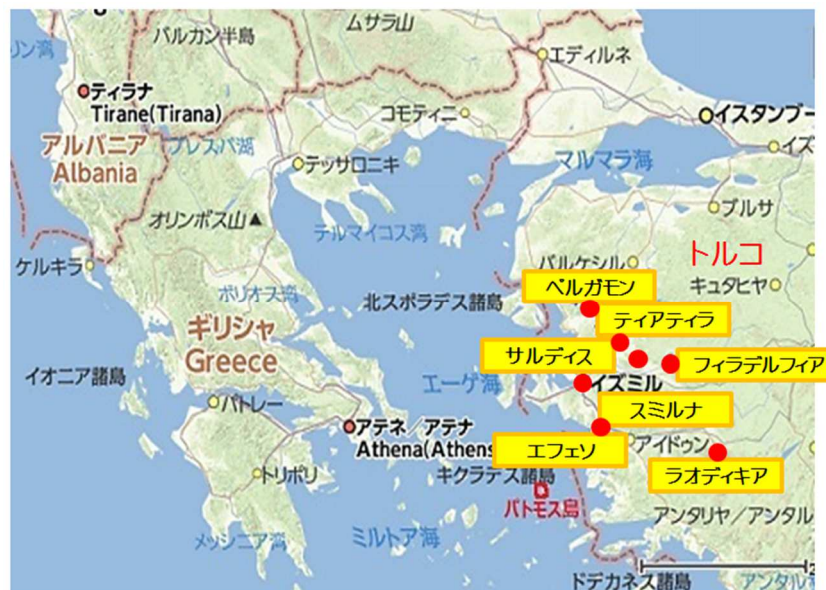


## ✠017 黙示録7つの教会

<黙示録1:11>

・その声はこう言った。「あなたの見ていることを巻物に書いて、エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキアの七つの教会に送れ。」(新共同訳)  
・その声はこう言った、「あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオディキヤにある七つの教会に送りなさい」。(口語訳)

ヨハネの黙示録は、実在した、当時(現在のトルコ)にあるの七つの教会に送られたものです。



◆エフェソ（ギリシア語：好ましい・望ましい）は、古典ギリシア語読みではエペソス、現在のトルコ語でエフェスと呼ばれている。現在は、遺跡が残っているのみ。

→好ましい教会であるが、初めの愛から離れてしまった。→悔い改めて、初心に立ち戻れ。(2:1~7)

→使徒時代以降の教会（AD31~AD100頃）

◆スミルナは、古代ギリシア語でスミュルナと呼ばれました。現在のトルコでは、イズミルと呼ばれ、現在、トルコ第三の人口を持つ都市である。色々変遷があった後1415年オスマン帝国に占領された。

→殉教に苦しみ迫害に耐えた教会。

→完全な愛は恐れを締め出す。死に至るまで忠実であれ。(2:8~11)。

→様々な迫害の下にあった苦難の教会（2-4世紀、AD100~AD313）

◆ペルガモンは、現在は、ペルガマと言われ遺跡が観光地となっている。

- 間違った教えを持ち込んだ世俗的教会、悔い改めの必要があった。→悔い改めよ。(2:12~17)
- 迫害の後、コンスタンチンによって公認され、さらに国教とされた教会、この世の政治と結婚した教会(4-6世紀、AD313~AD538)

◆ティアティラは、現在アクサヒルと呼ばれている。

- 不品行な女預言者に惑わされた教会。→キリストの福音とその信仰を守れ。(2:18~29)
- この世のシステムとの結合の後発展した中世までの教会(6世紀-16世紀)

◆サルディスは、現在のサルトにあった古代の都市です。現在は、遺跡(サルト付近)。

- 目を覚まし、悔い改めよ。(3:1~6)
- 眠っている、また死んでいるとされた(賞賛無し)の教会。(16世紀~18世紀)
- 中世の暗黒時代において、具体的にはローマカトリックに対して、例えばマルチン・ルターが立ち上がり、「行いによらない、信仰による義認」の真理を再発見し、信仰復興が叫ばれ、プロテスタントの諸教派が次々に生まれた。主はこの教会にいるレムナント(神の残された者)に対して、再臨への備えと共に、勝利を得る者には白い衣の約束、名前のいのちの書への記載、父と天使の前での名前の公開を約束されています。ただ、この時代に人々は教理問題を議論することに熱中し、信仰上の問題や思想を議論することに熱中していた。このように、宗教改革に酔いしれて、改革者精神が失われ、新しい宗教改革の時代となっていった。

◆フィラデルフィアは、現在のトルコ語ではアラシェヒルと呼ばれている。

- 忍耐を持って最初の愛と兄弟愛(フィラデルフィア)を守った教会(19世紀)。(3:7~13)。

◆ラオディキアは、現在のトルコのエスキ・ヒサルという村であるといわれている。現在は、遺跡(エスキ・ヒサル付近)。

- 熱くもなく冷たくもない“なまぬるい”信仰を持った教会。→今(私たち)の時代の教会
- 熱心に努め、悔い改めよ。(3:14~22)

ラオディキア(人々の裁き:ギリシア語)は当時きわめて富んでいた町です。金融の中心地、毛織物業が盛んで、有名な医学の学校があり、ラオディキアの目薬は有名でした。

豊かに繁栄していた街の雰囲気は教会の中にも深く浸透していた。

彼らもキリストを神としていた。しかし、神への信頼という信仰の基本が見あたらなかった。実際の生活の中で神を必要としていない。彼らはお金の神を信頼していた。傲慢な鼻持ちならない姿だった。

神ではなく、お金や物質によって満足しようとする人々に、心は惨めで、衰れで、貧しく、目の見えない、裸の者だと主は語られた。

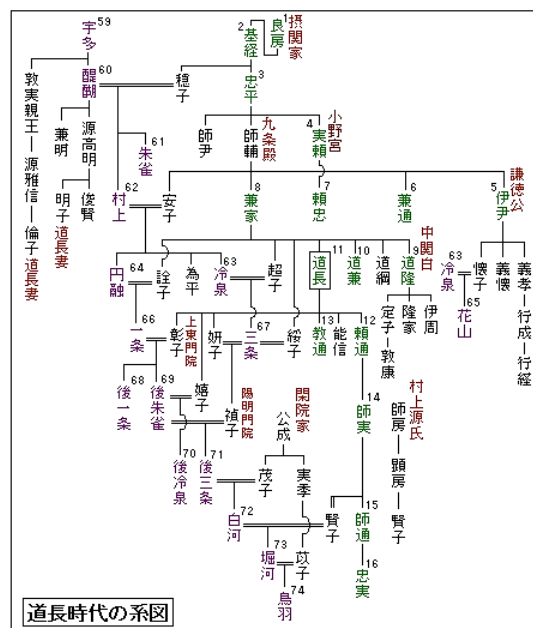
【参考】平安時代の貴族で、栄華を極めた人物といえば、あの藤原道長。藤原道長は、『源氏物語』の主人公・光源氏のモデルだったとも言われ、摂関政治の全盛期を築き上げた人物である。

道長は、娘の彰子を一条天皇と結婚させ、孫である後一条天皇が即位すると摂政に就任する。その後、次々と3人の天皇の外祖父となり、自身は保護者・後見者として摂関政治を行った。

この栄華の絶頂であった藤原道長が宴で詠んだ有名な歌があります。

「この世をばわが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることもなしと思へば」『小右記』

この世の全ては、私（道長）のためにあるようなものだ。私の心は、この満月のように何も足りないものなどない。



しかし、この有名な望月の歌を詠んだ年の頃から、道長は体調を崩し始める。

平安時代、病気の原因は怨霊の祟りであると考えられていた。そこで、道長は出家し、念仏を唱える日々を送ります。ある程度、健康は回復するのですが、出家の6年後に、三女・寛子が病死、六女・嬉子が難産の為、急死。2年後には三男・顕信と次女・妍子も死去する。

相次いで、子供たちに先立たれた道長は、ショックで衰弱し、危篤に陥り、道長は息を引き取った。62歳だった。その死因は、記録から糖尿病ではないかといわれている。

#### ※道長の子供

長女：彰子(しょうし、あきこ)、長男：頼通、次男：頼宗、次女：妍子(けんし/きよこ)、三男：顕信(あきのぶ)、四男：能信(よしのぶ)、五男：教通(のりみち)、三女：寛子(かんし/ひろこ)、四女？：威子(いし/たけこ)、六男：長家、五女：尊子(そんし/たかこ)、六女：嬉子(きし/よしこ)、長信(ちょうしん)